

碎けた米国の甘い幻想

去る二月上旬のシュルツ米國務長官訪中は、米中関係の当面の膠着状況を象徴的に描き出す結果となった。シュルツ訪中に賭けたアメリカ側の期待がきわめて大きかっただけに、今回の米中外交相談についての中国側の冷やかな反応と不満足に、いまワシントンは深刻な衝撃を受けているにちがいない。趙紫陽中国首相の年内訪米を迎え、次期大統領選挙までにレーガン大統領の訪中を実現しようと考えてきた米國務省の目論みも、はずれてしまった。アメリカ側がシュルツ訪中の成果として趙首相の年内訪米決定というニュースを流した直後に、中国外務省スポークスマンが、趙首相の訪米は受諾したけれど、年内訪問は未確定だと打ち消し、新華社が米中間の懸案はシュルツ訪中によっても解決しなかった旨を示唆する（ともに、台湾関係法の廃棄を改めて迫るなど、ワシントンはまったく面目を失ったかたである。そのうえ中国側は、シュルツ氏がまだ帰国途上とい



シュルツ訪中不成功の教訓

東京外語大教授

中嶋 嶺雄

特使派遣、円借款も効薄い

うのに、「湖広鉄道債券」という、一種の古証文、をめぐる。米中対決への中国側の不満を覚え書きとして公表するなど、この三月上旬からの中ソ高官会談にそなえて、米中間の不協和音をあえて増幅しようとしてきている感もある。

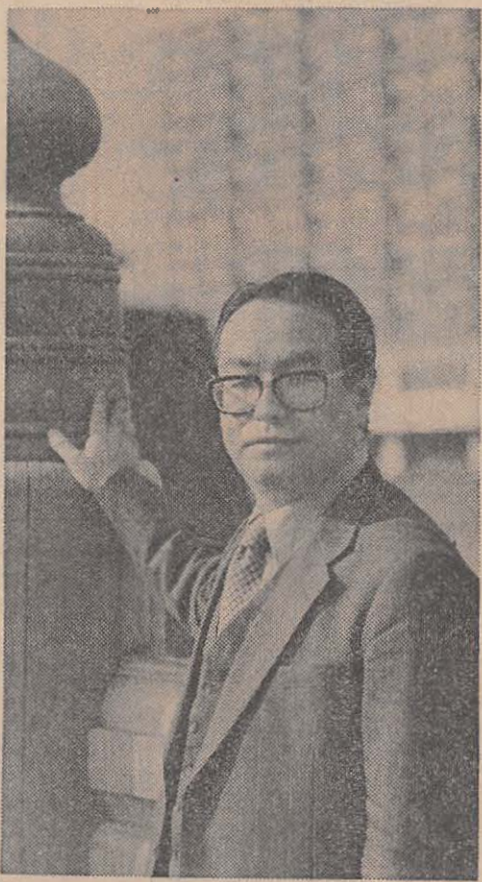
つめていけば、今回のような結果は決して予想できないことではなかった。この点では、中国側最高首脳である、対ソ改進黨の胡耀邦総書記が今回、シュルツ長官に会わなかったことも意味深い。もっとも、ワシントンは、わが国の政府・外務省同様に、永遠の中ソ対立という神話にとりつかれてきて、中ソ和解への潮流の変化を内在的に読みとることができず、甘い幻想を抱いていたのだから、今回のような結果は、いわば

数カ月まえまでは、今日のような中ソ接近の動きさえ「絶対にあり得ない」と主張していたのである。そもそも、今回のシュルツ訪中は、アメリカにとって、世界戦略上、きわめて重要な意味をもっていた。いうまでもなく、台湾関係法や台湾への武器供与など、台湾問題をめぐる米中冷戦を解消することも、去る一月に決裂した米中繊維交渉など東務問題を解決することによって、米中関係の大幅な改善がはか

ユルツ訪中には当然含まれていた。だが、中国側は、これらのアメリカ側の戦略を十分に承知しながら、結果的にきわめて冷たかった。その理由は中国側がアメリカからの高度技術供与問題で不満があるといった次元の問題であるよりは、より高いレベルの戦略上の対米姿勢に起因すると解釈すべきであろう。

対日姿勢の変化に留意を

米中関係へのこのような中国の対応は、同時に、日中関係にたいする中国の姿勢の変化とも連動する。たとえば、中曽根首相の訪韓や訪米についての中国側の見方が、きわめて警戒的になってきている（ここに注目すべきだ。その中国側の対日姿勢は、次第にソ連や北朝鮮の対日姿勢と似かよってきている。



しまった。しかも、シュルツ國務長官自身は、このところアメリカ内外で評価が高く、その能力、識見が注目され、北京では異学識外相のほか、鄧小平党中央顧問委主任、趙紫陽首相、張愛萍国防相、方毅国家科学技術委主任、王丙乾財政相、夏石對外経済貿易次官と七人も中国側首脳とすべて個別会議を行うという精力的な外交を展開したにもかかわらず、このような結果になっただけに、ワシントンの失望は大きいのではないか。

高度な戦略上の対米姿勢

だが、最近の中国内政の変化に伴う中国の世界戦略の根本的転換を見

自業自得たともいえよう。

去る二月上旬、私はハーバード大学のジョン・K・フェアバンク東アジア・センターで開かれた「ケンプリッジ中国史論争」の執筆者セミナーに出たが、アメリカの対中政策の形成に参与してきた何人かの学者がおしなべて、中ソ和解は限定的なものであり、米中関係は必ず打開できる（と語っていた。彼らは、つい

られねばならなかったのである。

米中関係の冷却化と反比例して、昨年後半以来、急速に表面化してきた中ソ接近を牽制するという重要な戦略的要請があったことについては、いまさらいうまでもない。そのこと。七〇年代のような米中関係を回復、S S 20の極東配備や米ソ中距離核戦力（INF）削減交渉などをめぐる対ソ戦略に備えるとの意味がシ

も記憶にとどめるべきであろう。

そうしたなかで、中曽根政権としては、十八日、自民党の二階堂幹事長を特使として派遣するとともに、第二次円借款を大體に供与して中国とのパイプを維持しようとしている（よひであるが、二階堂訪中や円借款で中国を納得させ得るほど状況は甘くはない。安倍外相はじめ政府当局者の冷静な判断を切に望む。